ストーンウォーク JAPAN 2005

被爆60年　ナガサキ～ヒロシマ

UNKNOWN CIVILIANS KILLED IN WAR

戦争で犠牲となった無名の市民のために

碑石の周りで8月6日午前8時15分、ダイイン　　撮影 ■ 戸村 良人

碑石はフェリーで北九州から下関へ　　撮影 ■ 跡田 久美子

玄界灘の海風がここちよい

大雨の中、筑紫野市長が激励に来てくれました　　撮影 ■ 跡田 久美子

びっくり！　際立つ長身の女性たちが参加

北九州を行進中のひと休み

原爆ドーム前でディオラを歌う福岡の女性たち　撮影 ■ 跡田 久美子

原爆のあとに置き去りにされて死んでいった子どもたちの泣き叫ぶ声が、私の頭から離れませんでした

ピース アビー ■ ドット・ウォルシュ

ストーンウオーク到着式でスピーチする筆者

人生の中でもっとも素晴らしい体験をした日本から戻ったばかりです。

この素晴らしい体験が始まったのは、2005年の1月に（日本山妙法寺の）僧尼がオーガナイズしてくださった日本への旅行でした。このとき、私の友人であるピースフル・トゥモローズのアンドレア・ルブランさんも同行しました。この旅行では、ホームステイやお寺に寝泊りして長崎や広島、（福岡）の人々と出会いながら、言葉や文化の違いやお風呂、温泉も体験しました。

日本の人々は本当に親切で、私たちを温かく迎えてくれました。このとき私たちは、被爆者の証言に心を打たれました。しかし、その時点では、ストーンウオークができるとは思っていませんでした。というのは、このプロジェクトに完全な責任をもちながら、克服していかなければならない障害があまりにも多かったからです。そんな私の心を変えさせたのは、長崎と広島の原爆資料館にあった心をかき乱すような忘れられない写真や展示物でした。1945年の原爆のあとに置き去りにされて死んでいった子どもたちの泣き叫ぶ声が、私の頭から離れませんでした。「お母さん、お母さん」と泣き叫ぶ子どもの声は、母として祖母として私の心を強く打ちました。それから私は、ストーンウオークを行うことは「できない」と言えなくなったのです。このようにして、ストーンウオーク　ジャパンは着想され、私は1月に会った日本の人々とコンタクトをとりながらオーガナイズを始めました。

ストーンウオークには、2004年のストーンウオークに参加していたブルース・ニコルスさんとジム・マーゴリスさん、そして日系アメリカ人のヨーコ・カワシマ・ワトキンスさんが参加することになりました。ヨーコさんは、第二次世界大戦後彼女自身の子ども時代の体験を書いた本の著者でもあります。

ストーンウオークの準備段階では、各県のオーガナイザーとなった人たちとたくさんのEメールでのやり取りがありました。道路許可や船積みの準備のための詳細などが必要でした。碑石（メモリアルストーン）や台車は、きれいにしたあと5月に日本へ船積みされ、その後神戸に到着し、長崎にトラックで運ばれ7月2日の開会式に向けて爆心地公園に運ばれることになりました。すべての準備に私がアメリカで関わっていたとは言え、私たちが日本でどこに宿泊するのか何を食べるか、また600キロの道のりで十分なサポートがあるかどうかも分かりませんでした。私にとってこの旅は、日本の人々に完全に依存する信頼の旅でもありました。

台車と碑石は、7月1日に（長崎に）到着し、下り坂で必要なブレーキと舵取りをする運転席のドアを修理して準備は整いました。

開会式には、200人以上の人が集まり、長崎市長の代理人と教会の司教のスピーチや被爆者の方々の合唱もありました。私は、被爆者の方々の歌を聞きみんなのサポートを見ていると感激で涙がとまりませんでした。

まもなくすると、人々の安全やみんなでどのように石を曳けばよいかをサポートしながら碑石を曳き始めました。この時点ですでに、ヨーコ・ワトキンズさんの通訳が、私たちの道行きの間じゅう必要になるであろうと、はっきり分かりました。台車がバックできないと知るのは重要なことでした。私たちの初日は、矢上まででしたが、石を曳いた日本人もアメリカ人も疲れ果てていながらも、歓喜に沸いていました。

■長崎県

開会式の日から4日間をかけて長崎県を通りましたが、その間、特に学生のグループが、驚くようなサポートをしてくれて石を曳きました。長崎大学で教鞭をとる前川智子さんは、彼女が受け持つほとんどの学生の参加をとりつけ、また地元の運動部の高校生のサポートもとりつけ、台車と石を山越えさせました。

このときの私の一番の思い出は、学生の熱意とフレンドリーさです。多くの学生が、曳く前に石に集まった時がとても感激したと伝えてくれました。ひとりの若者が、「あなたたちが私に力を与えてくれました」と言ったことを覚えています。私たちと同行したお坊さんたちも、こんなにたくさんの若者が、暑い中自ら喜んで石を曳いたことにとても喜んでいました。

また私たちは、ある素敵な女性が所有する山にあるリトリートやあるお寺で、ご馳走になりながら寝泊りした忘れられない体験がありました。私たちを迎えてくれる人々は、とても親切で温かい人たちでしたし、また、石を曳いた長い一日のあとのお風呂も至福でした。通し行進者であり、僧でにわか医者でもあるチョウさんは、私の足を最初に診てくれた人です。彼が、足にできた水ぶくれを治療してくれたおかげで、そのあと水ぶくれには二度とならなかったのです。

■佐賀県

これまでお世話になった長崎の人と別れるのはつらかったのですが、すぐに佐賀の新しいオーガナイザーの人たちと会いました。少人数でしたが、みなさんとても親切で温かい支援をしてくださいま

全員で作り上げる清々しい達成感、充実感、誰もが満たされているという状態……それが平和なのかな

ストーンウオーク福岡 ■ 植木 智子

前列真ん中が筆者

ストーンウオークとは……

ピース・アビー（非暴力に関するプログラムを行う修道の家）が1999年に始めた市民運動。戦争で犠牲となった一般の人々を追悼するため、UNKNOWN CIVILIANS KILLED IN WAR（戦争で犠牲となった無名の市民）と刻まれた2000ポンド（およそ900キログラム）の碑石を人力で運び、そこに集った人々と共に平和への歩みを刻むウオークのこと。ピース・アビーのルイス・ランダさんが提唱し、石はベトナム戦争時に徴兵拒否を行ったモハメッド・アリ氏が寄進したという。1999年はマサチューセッツ州シャーバーンから国立軍人墓地のあるアーリントンまで。2000年はアイルランド、2001年は英国で行った。そして、2004年、ボストンからニューヨークの9・11の「グラウンド・ゼロ」までをピースフル・トゥモローズ（平和の明日をめざす9・11遺族の会）と共にストーンウオークを行った。ストーンウオークジャパン2005は特に被爆60年を祈念するためにこの２つの平和団体の共催により行われた。７月２日、長崎の爆心地公園を出発、8月4日に広島の原爆ドームに到着するまで、およそ1ヵ月、多くの人々と共に平和の歩みを進めた。

ストーンウォーク……この石を曳くというシンプルな行動には、広島・長崎という特定の地域からのみ平和を発信するという以外にも佐賀・福岡・山口で直接的に沿道の人々に平和を訴えるという力強い行動だと思いました。実際に石を曳いた人々はもちろん、沿道の人々も、この石が通ることによって、今年が被爆60年という年であることが思い起こされたことでしょう。

そして、今回のストーンウオークは3つのグラウンドゼロ、ニューヨーク、長崎、広島を結んだ歩みであったことに大きな意味があったと思います。ピースフル・トゥモローズのアンドレア・ルブランさんはじめ9・11の遺族の方、被爆者の方、彼等一人ひとりの痛みは個人的なものかもしれません。しかし、3つのグラウンドゼロは歴史的には人類の痛みでもあることを認識しなければなりません。彼等の痛みに寄り添い、その痛みを知る機会をこのストーンウオークは与えてくれました。痛みに寄り添うことは「このような悲惨な体験は私たちで終わりにしなければならない」という被爆者の方々の次世代に対する切なる思い、「犠牲を戦争の口実にしないでほしい。犠牲になった私たちの家族はそれを望んでいないはず」と新たな犠牲者をつくらないように平和を願って行動するピースフル・トゥモローズの方々の思いを継承し、共に平和への歩みを進めることでもあると思うのです。

しかしながら、石を曳くことにどんな意味があるんだ？　世界中で戦争を起こしているのはアメリカ人ではないか、そんな国の人と共に歩くのはいかがなものか……等々事前にストーンウオークの話をしに行くと必ずしも肯定的に受け取られないこともありました。そんな彼等が、実は、平和とは何かを学ぶチャンスを自ら失っていたことに気づきもしないのは非常に残念に思いました。

私はストーンウオークに参加することで平和ということを実践から学ぶことができたように思います。隣の人との語らいや、疲れていないか、のどは渇いていないかなど相手を気遣うことなどが新鮮でした。そして、坂道、難所があれば全員で力を合わせて乗り越えるのです。その達成感をその場にいたアメリカの方々、在日朝鮮人の方、スリランカの方、アイルランドの方などと共有できたこともとても清々しい印象として残ったものです。全員でつくり上げる清々しい達成感、充実感、誰もが満たされているという状態……それが平和なのかなと思います。少なくとも、そこには確かに平和がありました。そのようなストーンウオークを、戦争で犠牲となった人々はきっと祝福してくださったと信じていますし、そのような状態は彼等の望みでもあったろうと思っています。アメリカ側が持ってこられた参加者名簿には最終日、1000人あまりの人の名前が記されていました。もっともっと多くの人に参加してもらい、このようなことをたくさんの人と共有したいと思いました。暴力の連鎖とは対極にある、人を思いやるという連鎖はつなげていかなければなりません。

2005年の夏は新たな平和への一歩ということを深く心に刻むことができた夏でした。

石に触れ　うつむきそっと　涙する　友の横顔　胸に染む夏
シャワー浴び　頬伝う湯の　しょっぱさに　今日一日の　道行き想う
国を越え　宗教を超え　山越えて　運びし石に　千羽鶴舞う
8月の　日差しに揺れる　原爆碑　誓い新たに　60年の夏
言葉なく　熱き抱擁　繰り返す　600キロの　道行きを終え

夏草　葵

アジアの人にはもっと深くて今も疼き続ける傷がある

ストーンウオーク福岡 ■ 石川 晶子

広島の縮景園に、足を怪我したアンドレアさんを見舞って

「美女軍団」に導かれ

“なに？　7月に1トンの墓石を人力で、長崎から広島まで運ぶ？”ドットさんの提案にど肝をぬかれたのは今年の1月17日だった。とっさにネガティブ思考に支配され、マイナス要因が次々と脳裏をかすめた。むし暑苦しい7月、ヒートアイランド現象、梅雨、片側1車線の道路と渋滞、その排気ガス、原水禁、原水協の平和行進まっ最中、……とにかく条件は最悪だ！

しかし、その3、4ヵ月後には、植木さん、徳永さん、梶田さん、跡田さん、奥野さん、延原さん、恐れを知らぬ美女軍団が地図とメジャー片手に道路探索行脚へと飛び出していった。そして、文字通り「ストーンウオーク　福岡」に、道筋をつけてくれたのだ。彼女たちのさわやかな行動力と、情深い、強い意志力を心から尊敬し、称賛したい。そして、その周囲には、次々と善男善女が集まり始め、絶妙なアンサンブルがつくられていった。ここが、福岡の特長だったと思う。

インターナショナル・みそスープ

私は福岡地区ではキッチン・スタッフを自認していたので、体力を温存しながら食事づくりだけを務めた。同じ釜の飯を楽しそうに食べてくれるストーンウオーカーたちを見て「平和がここにある」と感じたものだ。

古賀市の広い調理室では、疲れがとれたウオーカーたちも、具だくさんの味噌汁、サラダ、煮物づくりに加わった。冗談をとばし、写真を撮り合いながら、学生時代のキャンプ気分。“ハネムーンサラダにしようか”と私。“それ、どんなサラダ？”“レタス・オンリー（Let us only)よ”“「私たちだけにしておいて」”カナダで覚えたジョーク……と言うと、ドットさん、ジムさんは大笑いしてくれた。おそらく、北米の人には陳腐なジョークだと思うがジムさんは「初めて聞いたよ」と驚いた様子をみせて、しらを切り通した、芸達者な人である。ドットさん、ジムさんは、たまねぎ、じゃが芋、なす、かぼちゃ切り、ジムさんは味噌をこすまですべてやり遂げた。阿部さん、山本さんが子ねぎ、ミョウガを美しく刻んでくれ、チョウさんが“おいしいからお替わりをしよう”と皆に呼びかけ、席をたってサービスに努めてくれた。延原さん手作りの「ラタトゥーユ」の香りにウットリ！　いつまでも記憶しておきたい夕食時の楽しい思い出だ。その日帰宅するとき「次は17日に、石を曳きに来ますからね」と言うとジムさん曰く、「17日は僕の誕生日だから、来てくれるのが何よりのバースデイプレゼントだよ」日本の男たちよ、こんなことを言ってごらん、人生少しは明るくなるかも、という訳で、17日にはジムさんご夫妻用に、味噌汁椀を二つプレゼントし、私も喜んでワナにはまったという顛末。その後彼は、被爆者のメッセージを北米に伝える「ネバーアゲインキャンペーン」のホストになることを約束してくれた。これは、「ストーンウオーク、ビューティズ」（美女軍団）に対する彼の返礼なのではないかと思われる。

戦争犠牲者はここかしこ

意外なことに、碑石を曳いている時は殆ど何も考えていないのだ。前の人の足を踏みつけないように、とか、風が心地いい、とか思うだけで、心はいたってシンプル。何も考えないでいいというのも「平和」のひとつに違いない。途中家に帰ったり、夜寝るときは別である。私の家族をはじめ、今も尚戦争を引きずって生きている人は、周囲に何人もいる。夫、

アメリカの原爆投下の残虐行為を告発し、懺悔の祈りと断食をして核兵器の廃絶を訴えるジョン＆ケリー・シューシャード夫妻

北九州を行くストーンウオーク

平和への想い
たくさんの素晴らしい出会い

ストーンウォーク福岡 ■ 徳永 理美

ディオラ～平和へのあゆみを聞いて感極まる。左からアンドレアさん、ドットさん、筆者、植木さん

ストーンウォークが広島に到着してから、もうすぐ1ヵ月。終わってからの私は、アメリカ人で通し行進者の一人だったヨーコ・カワシマ・ワトキンスさん(71歳)の「家に帰ったら、心にぽっかりと穴があくと思います」という言葉通り、本当にぽっかりとゴルフボールくらいの穴があいて、すきま風がピューピューと心の中に入り込んでいる感じがする。

ストーンウオーク（SWと表記）は、私にとって一体なんだったのだろうと考えた。被爆60年の今年、すべての戦争で犠牲になった人を悼み平和を願いながら、1ｔもの重い石を曳いて長崎から広島まで歩くという道行きは、最初は無謀な計画のようにみえた。曳く前は、「湿気の多い暑いなか、そんなきついことしなくても……」と正直思ったこともある。しかし、実際携わってみると、じつに素晴らしい体験だった。確かに暑いときもあったし、睡眠不足で歩きながらスタッフとしてお世話をさせていただいた。でも疲れを感じなかったしいろいろあっても全く苦しいと思わなかった。逆に、起こることすべてを楽しんでいた自分がいた。なぜだろう。

一番の理由は、たくさんの素晴らしい出会いに支えられたからだと思う。ホームページにアップされた写真を見る度、その時々の情景が思い出されて胸が熱くなる。スタッフとの出会いはもちろんのこと、アメリカの方々や通しで歩いた日本の方々、日本山妙法寺の方々、そして途中で歩きに参加された方々や道行きを陰で支えてくださった方々。歩くサポートだけでなく、飲み物や食料、金銭的にもその他必要なものをカンパしてくださったたくさんの方々に支えられた。沿道では、多くの人が手を振ってくれた。数え切れないほどの「平和への思い」。その「思い」は、人それぞれに意味があることを交流会や何気ない会話の中に読みとれた。

たとえば、9･11の遺族であるアンドレアさんなど「ピースフル・トゥモローズ」の人々は、多くの被爆者の方々と同様に、個人の悲しみを平和を願う行動にかえて歩き、在日朝鮮人のチョウさんは、原爆で亡くなった同胞への鎮魂として、佐世保から通しで行進に参加していた山本さんご夫妻は、戦争で亡くなったお父様のための慰霊として、それぞれの想いを抱えて歩いていた。また、ここには書けなかった多くの方の思いが石にのって運ばれていった。

ついに平和公園に到着！　充実した顔・顔・顔

石を曳く前にはいつも、参加者が石に触れながら犠牲者への祈りがなされた。その時に語られた「私たちの一歩一歩の歩みは、平和への歩み」という言葉は、まさにSWの意味そのものだった。一人では1ｔの重い石を曳くことはできないが、多くの人と力を合わせれば一見不可能と思えることでも可能になることが、このSWを通して感じたことだ。

今年の夏は、一人ひとりのなかにある「平和への思い」がマグネットの役割を果たした石にひきつけられ集まったことで、ストーンウオーク自体が平和の発信源となったように思う。今年の夏、ストーンウオークを通しての素晴らしい出会いに感謝すると共に、心を重ねることの素晴らしさを教えてくれた皆様に感謝を送ります。

小さな一歩、でもそれが違いをもたらす一歩となるんですね。ありがとうございました。

最後に、すばらしい歌をご紹介します

7月20日から25日まで参加したピースフル・トゥモローズのメンバー、デリ

ディオラ　～平和へのあゆみ

人は誰かを傷つけると
いつか自分も傷つくもの
でも分かり合えば平和は　すべてのたましいにやどるでしょう
たがいに与え受けとめて　信じ生きてゆくこと
それは　愛

力と平和の意味を分かり合い
戦いをとめる勇気をもとう
それは長い闇をとおり抜け　輝く明日への旅路
たがいに与え受けとめて　信じ生きてゆくこと
たがいに与え受けとめて　信じ生きてゆくこと
それは　愛